



HACK

2

道行

KAI SHIGIHARA



2.道行

2 道行

三日後。

時間ぴったりに現れたジュリアスは、別人のようになっていた。

まず、あのうっとおしかった髪を、さっぱりと散髪していた。軍人にしては長めだが、耳を出して、後ろにすっきりと流している。一筋落ちている前髪がかかる広い額、男らしい眉、知的で神秘的な瞳、白い頬や顎に無精ひげはなく、清潔感にあふれている。

白いシャツにオフホワイトのサマーセーターは細い体にフィットし、ブルージーンズは逞しい腿や脛の筋肉にそって絶妙なカーブを描いていた。

第一印象のとおり、中性的な美貌ではあるけれど、決して男らしくないわけではない。彼の内側には、男性特有の熱い力がちゃんと存在していた。多分、初対面のときは、長い髪の向こうに隠していたのだろう。

(ああ、これは……)

レスリーと目と目が合い、挑むようにきらりと光りがともったように見えた。

彼はとびきりのいい男だ。ドミニクのように頭の中だけで愛でる人としてはよくても、二人きりで仕事をする相手としては……。

「おはよう、レスリー」

「おはよう」

敬語にするかどうか、少しだけ悩み、やめておいた。

今日からしばらく、ジュリアスの恋人を演じなければいけないのだから。

「荷物はこれだけ？」

「ええ」

どうやらジュリアスは、慇懃無礼という作戦を選択したようだった。この仕事の間だけは普通に接するが、決して初対面の時のレスリーを許したわけじゃないぞということだ。

(私だって、許したわけじゃないけどね)

と、ため息をつく。レスリーの思考に、ジュリアスの反応はない。予想通り、初対面のときのホットラインはすでに切れているようだった。

「私が運転するよ？」

ジュリアスがレスリーのために助手席のドアをあけた。だがレスリーは、車の鍵をちょうどいいと、ジュリアスに手を差し出す。

「車の運転ぐらい、俺だって出来る」

「でも、運転中にぴぴっと何か受信して、事故になったら困るでしょ」

「……そんなことは、滅多にない」

「私だって、車の運転ぐらい出来るし」

「俺が運転する」

視線で、助手席に座るように促された。どうやら、ジュリアスに譲歩するつもりはないようだった。

(最初から喧嘩してもね)

レスリーは、促されるまま、助手席に乗り込んだ。

二人は今日から、結婚前の旅行を楽しむ恋人同士になる。勿論、偽装だ。

そして、車で隣国に入り、リゾートホテルにチェックインする。そのホテルを拠点に、ジュリアスは盗まれたデータの奪還を試みる。それが、二人の任務だ。

盗まれたデータは、レイの会社がシステム開発を担当した、政府関係の理学研究所のとあるウイルスとワクチンの処方箋。盗んだのは、隣国レイノックスのライバル会社でほぼ間違いはないが、証拠はない。

また、隣国レイノックスとは、長く友好関係にあり、出来れば波風をたたせたくないと、政府も思っている。

なので、こっそり潜入してもらい、こっそり奪還してもらおうというのが、政府と軍の選択した作戦だ。

そして、この作戦に最も適任とされたのが、ジュリアス・マナーズ。非常に高レベルなテレパシストで、その感応力でコンピューターにシンクロできるのだそう。

ジュリアスの能力について、レスリーは資料を読んだし、兄であるドミニクから説明も受けたが、まだぴんとはきていない。人智を超えた力なのだから、実際に目にしなければ理解するのは難しいだろうと、割り切ってもいる。それに、レスリーの役割は、ジュリアスの能力を理解することでも、手伝うことでもない。

ドミニク曰く、ジュリアスは優秀すぎて、仕事に没頭しすぎると自分が生身の人間であることを忘れてしまうのだそう。コンピューターの前に何十時間でも座りこみ、そのネットワークをたどり、どこまでも自分の意識の手を伸ばしていく。その力は無尽蔵なのかもしれないが、力を生み出している肉体はそうはいかない。食べなければ栄養不足になるし、睡眠をとらなければ脳が疲弊してダウンする。レスリーの役割の一つは、ジュリアスに最低限の食事と睡眠をとらせて、結果的に効率よく仕事ができるように管理すること。

ジュリアスの力は、対象となるコンピューターが近くにあればあるほど、よく働く。そのため、レイノックスへと潜入する。盗まれたデータがあると思われるコンピューターがあるのは、リゾート地として有名なところなので、遊びに来た恋人同士を装うのが、レスリーの役割。

以上二つの役割だけなら、レスリーではなくて、他の若くて有能な女性なら可能だろう。それでもレスリーが選ばれたのには、もう一つ理由がある。

(イマイチ、納得できてないけど)

すぐに納得も理解もできないと思うけど、とりあえず、ジュリアスとは友好関係をお願いするね。と言ったのは、ドミニクだ。間違いなく、ジュリアスも同じことを言われているのだろう。だからこそ、歩み寄りだと思えた。となれば、レスリーも歩み寄らなければならない。馬鹿で強情な女と思われるのはごめんだ。

「この前は、ごめんなさい」

フロントグラス越しに前を向いたまま、レスリーは言った。ちらりと運転中のジュリアスの視線が来たのを感じたが、レスリーは前を向いたままにしておいた。

ドライブ中は、気まずい謝罪や話をするにはもってこい。個室だし、視線を合わせなくて済む。少しだけ気が楽になる。

「あなたの容姿をこきおろしたり、お父様のことを悪く言ったり、言いすぎだったわ」

「……………」

「言い訳だけど、すべて本心というわけじゃないのよ。私、頭の中で言いたい放題するのが好きな。それを口に出したりしないし、誰かに話すこともない。私のちょっとした、その、ストレス解消方法なの」

「……俺も悪かった」

ぼそりと、それでもジュリアスが言ってくれて、レスリーはほっとした。

「いいえ、あなたは悪くない。私が悪趣味だっていうのと、あれは事故なんだと思う」

「なら、その事故を起こしたのは、俺のせいだ」

「それはそうかも？」

「……………」

「だから、お互い悪かったということで、水に流さない？」

「……いいね」

「ありがとう。本当にごめんなさい」

事故だったかもしれないが、より傷ついたのはジュリアスのほうだ。誰だって、あんな風に自分の容姿を貶されたら気にする。ジュリアスが身ぎれいにしてきたのは、任務のためではあるだろうけれど、レスリーの心ない中傷のせいもあるのではと思うのは考えすぎだろうか。

許さないと言われたら、レスリーにはどうしようもなかった。男らしく許してくれ、レスリーの好みに合わせてくれたのかはわからないけれど、清潔感のある格好で来てくれたジュリアスの、度量の広さがありがたかった。

「君はいつもあんな風に頭の中で人をこき下ろすのか」

ジュリアスの声は低めだ。素っ気ない話し方もあって、人によっては怖く感じるかもしれない。だが、レスリーには落ち着く声の、率直な話し方だと思えた。

「まあ、そうかも」

「あの後、君のことを調べた」

「調べた？」

「君の周囲の人たちの表層意識を読みとってみた。君をどう思っているのか、皆の意見を知りたかった」

「どうだった？」

「クールビューティー。超有能。高嶺の花。私生活は謎。頭がいいけど、それをひけらかさない。優しいと無関心の紙一重。お近づきになりたいけど、そう簡単に手の内を見せない」

「そんな感じでしょうね」

意外な意見は一つもなかったので、レスリーはふむふむと頷いた。そんなレスリーを、ジュリアスはほんの少しだけ笑ったように感じた。唇の端が一ミリ上がったどうかぐらいの、微笑ともいえない変化かもしれないが、レスリーは嬉しくなった。

「毒舌、享乐的、頭がいいのは認めるけど、鋭すぎる。美人だけど、無表情」

「？」

「俺の第一印象」

レスリーは思わず嘖き出してしまった。

「あと、ドミニクのファン」

「勘弁して」

声をあげて、レスリーは笑いだした。それを、ジュリアスが驚いて見ているのがわかったが、やめようとか取り繕うとか、思えなかった。

事故だったが、もうジュリアスには無表情の裏側にある思考回路を見られている。羞恥心は、事故後の口喧嘩でほぼ消えた。

それに、本当の自分をさらけ出すのは、予想よりずっと気分がよかった。

「パブリックイメージってあるじゃない。私には、そうね、クールビューティーかな。そんな私がね、ドミニクってカッコいい！なんて悶えようなもんなら、周囲はドン引きなのよ。私だって、そうされたら傷つくしね。だから、黙っていた方が平和なの」

そのせいで、本音で付き合える友人はほとんどいない。

「君は頭の回転が速い」

「……そう？」

「同じものを見たり聞いたりしても、君は人よりワンテンポ速く反応する。洞察力にも優れているから、笑いの奥にある別のものを見つけたり、毒のありすぎるジョークにもすぐ気がつく。周囲とは違う反応をして目立つという体験を何度もしているんだろう。だからの、ポーカーフェイスだ」

そんな風に言ってもらうのは初めてだった。

無表情だ、何を考えているのかわからない、変わっているとはよく言われたけれど、こんな肯定的に分析されたのは初めて。

「同じスピードで思考する人となら、もっと楽に付き合える」

「外面ばかり気にする、自分のせいよ。プライドが高すぎるんだわ」

「プライドの高すぎる人は、思考を読まれていると知ると、絶対に俺に近づいてこない。君は、俺との任務を引き受けた」

「断れっこないもの」

命令ではなくお願いだから拒否権はあると、ドミニクは言ったけれど、現実的に上官のお願い

を断れるはずもない。

「それだけか」

「……もしかして、私の思考を読んでるの？ まだ、ラインはつながったまま？」

「読んでない。ラインも切れたままだ。でもわかる。君はとても有能な人だ。軍の通常任務なんて退屈だろう。事務官は君に最も適していない職だと思う」

「失礼じゃない？」

「君は俺と仕事するのが、面白そうだったんだ」

「あなたが面白そうだったわけじゃないわよ」

「君は面白い人だ。テレパシストと仕事なんて、普通は嫌がる」

ジュリアスが進行方向を見ているのを横目で確認してから、レスリーは彼の端正な横顔を見る

。

人の心が読めるなんて、便利そうで不便な力を持つ彼が、子供の頃からどれほどの苦勞をしてきたのか、レスリーには想像しかできない。だが、その想像力については他の人よりすぐれている自信がある。妄想だって得意だし。

「一番隠しておきたかった思考回路はもう見られちゃったし。それに、あなたは私の深層心理にまで勝手に踏み込むことは出来ないんだと、ドミニクに聞いたから」

ジュリアスに読めるのは、人の表層意識にある思考だけなのだと、ドミニクが保証してくれた

。

なにげなく考えていること、頭の中で思考していることは読まれても、脳味噌の奥にある過去の記憶や性格や本質、そんな深いものに触れることは出来ない。どこかの占い師のように、あなたはこんな人だと、色々なことを暴かれるようなことはないということだ。

「誤解のないように言っておくが、絶対に出来ないわけじゃない。ただ、それをするには、その人の同意が必要だ。俺を受け入れてくれる、すべてを解放してくれる、そういった完全な同意がないと俺には見えない。しかも、かなり難しいことで、時間もかかり、場所も選ぶ。やった後は、体力を使い果たして、しばらく動けなくなる」

「やったことあるの？」

「一度だけ。二度とやりたくない。俺の力は、生身の人間より、コンピューターと相性がいいんだ。……仕事の話进行しようか」

「ええ」

目的地までの移動が、二人きりでのドライブになったのは、潜入前に二人きりでの打ち合わせをするためでもあるのだろうと、レスリーは考えていた。なにしろ、初対面から今日まで、ジュリアスと会うことは一度もなかったのだ。打ち合わせも、お互いにお互いのことを知る必要もある。

(第一印象なんて、本当、あてにならない)

数時間前までは、あのきちゃんい世捨て人みたいな男と仕事とはいえ長期間二人きりなのかと、ブルーな気分だった。

外見の変化については手放しで喜べないけれど、世捨て人ではないこと、話して楽しい相手だ

ということは嬉しい発見だ。

ジュリアスとの仕事は、面白くなりそうだ。思っていたよりも、ずっと面白くなりそうだと、レスリーは口元に笑みを浮かべた。